

開 場 白

私はかつて、ヒットラーの『わが闘争』のなかで、「ドイツの諸新聞は、敵を滑稽な取るに足らない愚者として嘲笑した。ところが、ドイツ將兵は戰場でその敵に遇ひ、新聞にあつたことが本當でないといふことを知つた。彼らは恐怖はしなかつたが、勇氣を失つた。そして彼らの多くはすべての新聞記事を疑ふやうになり、ひいては戦争そのものの理由までも疑ふやうになつた。……」といふ章句を讀んだ。第一次世界大戦當時、祖國を守る若い兵士だつたヒットラーが、命令一下、塹壕を飛び出して銃劍を突きつけたとき、そこに立つてゐた相手は、葡萄酒と美食で膨れ上つた太鼓腹のフランス兵ではなくて、まるで自分とそっくりな、しかも鋭い表情をもつた立派な若者であつた。そんな戰場でのヒットラーのおどろきが、目にみえるやうであつた。敵を戯

畫化することの可否が、私に、はつきりとわかつた。

2

2

私がかつて、上海戦線に従軍して、一人の捕虜をとらへて質問した。

「どこから来たのかね。」

「四川の成都の在^びのものでがす。」

「どうしてこゝまでやつて来たんだい。」

「野良^{わらわ}に出てたところを引っぱられやして、伴れて来られただが、あんでも中国軍は大阪ちうところを占領しとるだで、わしら東京さ行つて『警備』するちうこんでわしたが……」

「冗談ぢやない。僕は大阪毎日・東京日日の新聞記者で、現にこゝへかうやつて来てるんだ。僕の顔を見たつて、『東京警備』だなんて、君達がいゝ加減なデマに迷はされてることがわかるだらう。」

「そんたら、俺ら郷里^{かた}さ歸つて百姓しますべえ。」

彼は四十に手の届きさうな篤實な農夫であつた。無論、文字も知らなかつたが、三人の子供が

あるといふ敵兵であつた。

3

私がかつて、友人の出征を驛頭に送つた。血を湧き立たせる感激がそこにあつた。「蔣介石を生捕りにして来るよ。」車窓から首を出して、その友人は怒鳴つた。私どもは夢中になつて『日の丸』を振つた。嚴肅な戦慄が背筋を走つた。そして、私はひとり家へ歸つて、机の前に端坐して、驛頭の感激を靜かに噛みくだいてみた。

この三つの事柄の間には何の脈絡もない。だが、この三つの事柄のいづれもが、さきに『支那探訪』を書き、いままた『支那裸像』を私が世に贈らうとする理由である。

これまで、支那の異教的な體臭のみが誇張して傳へられた。阿片と油つこい料理と荒淫と、支那は獵奇的な對象でしかなかつた。いまや、現實の支那を正確に知ることの精烈な要請を疑ふ人はあるまい。理窟を抜きにしても、現に手を握つてゐる『友』としての支那・戦ひつゝある『敵』としての支那を理解するためには、ただしく支那を知り、間違ひなく支那のすがたをとらへること

3

とが不可欠の前提でなければならぬし、これ以外の方法はありません。だから、私はできるだけこの主旨に忠實であるやうに努力したつもりである。

昭和十六年十月

著者

目次

開場白

第一部

煽動・宣傳・謀略・テロ	三
〇・〇團を挾む	四
藍衣社の解剖	五
宣傳戦の波止場・上海	五
抗戦支那の生態	七
買溜めと賣惜み	八
馬寅初博士の幽閉	五

石友三兄弟銃殺事件	六
インテリ層を語る	七

溜込達集	八
如是我觀中國人	八
蒙古の『お客様』	九
中國の豆腐	九

第二部

新生支那の清郷工作	101
中央儲備銀行論	113
1 前史篇	114

2	發。足 篇	一四四
3	環 境 篇	一五九
	獨ソ戦争後の中國共產黨	一七三
	抗戰支那經濟の研究	一八二
	密輸について	一八六
	ダングステン鎖	一九六
	支那と南洋との諸關係	二〇四
	蒙古人民共和國の現状	二二二
1	政 治 篇	二二二
2	經 濟 篇	二四三

インテリ層を語る

インテリとは？

私達は、いはば不用意に『インテリ』といふ言葉を使つてゐる。インテリといふのは、いふまでもなくロシア語のインテリゲンチヤの略語で、知識階級といふ意味である。それは大正末期から昭和初頭にかけて、この國を風靡した左翼理論と共に輸入された言葉で、労働者・農民に對する資本家・地主の中間に位する智力ある階層を指したものであつたが、いまでは労働者とか資本家とかいふ觀念から離れて、私達の日用語となつてしまつてゐる。

『蒼白きインテリ』といはれて、智能ばかり發達して優柔不斷、頭でつかちの實行力のない人達の代名詞のやうに思はれてゐるが、滿洲事變以來、とくにこんどの支那事變では、大君の御楯として召されて立派な働きをしてゐることは、よく新聞などで『インテリ部隊』の活躍を報じて

ゐるのも明かであらう。いかに多くのインテリが戰場のお役に立つてゐることか。そしてまたいかに多くのインテリが銃後の仕事を擔當してゐることか。

それでは一體、インテリとは何だらう？ 文字も讀めないし手紙も書けない者を、まさかインテリとはいふまいから、知識人には違ひないが、學校を出てなければならぬかといふに、『大學出のインテリ』といつて形容詞をつける位だから、必ずしも學校がインテリの條件になつてゐるわけでもない。まあ、インテリの談議はこれ位にしておいて、私達が普通にインテリと稱してゐるのは、教養ある人、學問ある人、智力ある人、聰明な人といった階層を指し、無論、學生もこの中に包含されるものだとして置くことにしよう。

ところで、問題は『支那のインテリ』であるが、支那には古くから士大夫・讀書人といふものがあつて、一般の民衆に對してむしろ君臨してゐるやうな状態にあつたのである。御承知の通り支那四億五千萬の人口のうち、文字の讀める者は一割内外、あとの九割といふものは無學文盲であつたから、このやうに讀書人の地位が高かつたのである。讀書人でなければ役人になることも官位につくこともできなかつた。清朝を倒し、革命が行はれ、新しき支那になつてからは、ハカ文盲(文語)を廢し、ハカ白話(口話)が用ひられるやうになり、ハカ識字運動(字を知るための運動)が盛ん

に行はれたから、支那の無學者の割合は餘程減少したやうだ。中支那のある省では住民の四割までが字が讀めるやうになつたと報告されてゐる。

支那革命そのものが、當時清朝の歴政下に喘いでゐた讀書人、いまの言葉でいへばインテリが在外華僑の援助を得て決行したものであるが、蔣介石の北伐前後から多くのインテリが革命の先頭に立つことになつた。とくに、現在では中華民國も三十年の歴史を持つに至つたから、支那生え抜きのインテリが漸次、頭角を現し出して來てゐる。こゝに注意しなければならぬのは、支那のインテリ層のなかで『外國留學生』が大きな地位を占めてゐるといふことである。それは、支那の半植民地的性格と關聯してゐる。つまり、支那は近代科學の點からいへば世界に立ち遅れてゐるから、多くの學生は外國へ行き、その國の學問を攝取し、歸國して支那の近代化に貢獻したのである。

外國留學生

清朝末期、支那が漸く歐米列強の帝國主義侵略の餌食となり出した時代から今日に至るまでの僅々四、五十年間に、外國留學生の數は二十萬を突破してゐると概算されてゐる。この意味では、

支那は世界第一の留學生派遣國であつた。現在、支那の政界、軍界、文化界、實業界その他各界の中心人物、指導者として活躍してゐる二千四百八十五名について、外國留學生の數をみると左のやうである。(實藤惠秀氏の調査による)

外國留學生	一、〇九七人
不留學生(國內學校出身者)	六〇三人
學歷不明者(獨學者を含む)	七八五人
合計	二、四八五人

では、この留學生の留學國別はどうなつてゐるだらうか？ その答は、日本四七九、アメリカ三二七、イギリス八三、フランス六七、ドイツ二三、ロシア一六、ベルギー一〇、スイス三、オースタリー一、イタリー一、日本および歐米三六、歐米數ヶ國五一、合計一、〇九七人となつてゐる。これによると日本留學生は四百七十九名で斷然第一位を占めてゐるが、さらに詳しくその内容をしらべると、陸軍士官學校の百十七名をはじめ軍事關係の留學校が多くを占めてゐることがわかる。

由來、支那のインテリを指導し、誤れる抗日へと煽動してゐる者は、いはゆる文化界の名士連

である。前掲の調査の対象となつた二千四百八十五名のうち文化界の名士と目される大學校長五七、大學教授一四二、教育行政官四六、出版關係者（新聞社・雜誌社・書店）六五、その他（學者・研究所員・圖書館長）六〇、計三七〇人についてその留學國別をみると、

アメリカ	一一〇	日本	六八
イギリス	二六	フランス	一七
ドイツ	四	ベルギー	四
イタリア	一	スイス	一
日本および歐米	一六	歐米數ヶ國	二一
不留學	一〇二	計	三七〇

といふ數字であり、アメリカ留學が絶対に優勢である。さらに、さきに挙げた外國留學生のうち日本留學生四七九名に對しアメリカ留學生三二七名で日本が第一位を占めてゐるといふものゝ國內學校出身者の六〇三といふ數字を見逃してはならない。なぜならば、支那の大學の大部分がアメリカ人の設立か、でなければアメリカ人の息のかゝつたものであるからである。事變前、支那の大學は四十二（うち國立十三、省立九、私立二〇）と稱せられた。しかして、この半數を占

める私立大學は殆んど歐米人によつて創設せられたものであり、北京の清華大學、輔仁大學、南京の金陵大學、廣東の嶺南大學、上海の聖約翰大學、滬江大學、蘇州の東吳大學、天津の南開大學、濟南の濟魯大學等々の大學らしい大學、設備の整つた大學のすべては歐米系とくにアメリカ系の大學であつたのである。

かういふ大學は校長をはじめ大部分の教授がアメリカ人に非ざればアメリカ留學出身者であつたことはいはずして明らかであらう。そして、こゝから巢立つた近代支那のインテリがどのやうな思想的方向を辿つて行つたか、これまた容易に想像できるであらう。

彼らが辿つた道

支那革命の先頭に立つた者はインテリであつたと私は述べた。その通り、民國以來、支那のインテリの役割は實に大きかつた。知識階級が國家の動向を左右したこと支那の如きは世界にその比類を見ないのである。『打倒軍閥』の旗印も高く、彼らは身をもつて北伐に従軍した。國民革命はソ聯赤軍のコミソール制度を模倣して政治訓練部を設けたが、兵士を政治的に訓練する仕事を受持つたものは當時の若きインテリであつた。彼らは従來『好人當兵』といはれ『兵八』と

嘲けられて、破落戸と同じやうな待遇を受けてゐた支那軍隊に國家意識を吹き込んだ。兵隊は見るからに遅くなり、昇進へやうに希望に満ちた面魂を持って來た。第一次世界大戰後の澎湃たる民族意識の昂揚がそこにあつた。

國民黨はナショナリズム（民族主義）昂揚の波に乗つて自らの地位を固めた。しかし、このナショナリズムは當然帝國主義反對の方向へと發展せねばならなかつた。コミンテルンは半植民、支那へボロディン、ガロン（ブリュッヘル元帥の假名）等々の指導者を送つた。都市においては外國人經營工場の労働争議が組織され、農村においては農民協會によつて一揆暴動が指導された。五・三〇事件をはじめとする大衆の反帝國主義デモが、全支各地に頻々として勃發し、武漢には赤色政府が樹立された。このやうな大衆動員を操つたものは主として一聯の共產黨員であつたが、支那のインテリもまた、この滔々たる流れの中を準さし進んだのである。當時のインテリでレーニン、ブハーリン、ブレハーノフの名を知らぬものなく、『共產黨宣言』を讀まなかつた者も一人もなかつたといつても言ひ過ぎではあるまい。かくて、支那は全く赤化するかに見えた。

ところが、昭和二年秋武漢・南京兩政府の合同が成立し、國民黨は共產黨員の除名を正式に決

議した。ついで蔣介石は南京に飛込み、共產黨員をはじめ作家、魯迅などに至るまでの左翼分子に逮捕令を發し、赤化思想を一掃して再び國家主義を昂揚した。ナショナリズムは國民的反抗の表現である。だから、滿洲事變を経て支那インテリの排日思想は一層昂められた。すべてのものが抗日の一點に凝固されたのである。かくて、昭和十一年暮の西安事件をキツカケとして、蔣介石は過去十年の共產黨討伐を中止し、却つてこれと提携して隣國日本に挑戰を開始した。恐るべき事變が日支の間に惹起されたのである。支那のインテリはたゞ無反省にこの間を彷徨してゐたに過ぎない。

戦時下のインテリ

戦争は、あらゆる文化機關の活動を停止せしめた。鐵と血の争ひは、それらのものを破壊し去つた。蔣介石政權は首都南京を捨て、武漢に移りさらに重慶へ逃遁した。天津の南開大學、北京の清華大學、上海の復旦大學、同濟大學、南京の中央大學等々もまた重慶へ移轉した。教授も學生もこれに隨つた。戦火に荒された大地と、大地を離れては一日も生きて行けない農民達だけが戰場に残された。多くのインテリも政府と共に輿地へ、輿地へと移動して行つた。學生軍が組

織されてあたら抗日の虚名のために碧血が流された。ある者は中國共産黨の首都である陝西省延安へ逃げた。ある者は『支那の外國』である上海、天津等の外國租界へ立籠つた。民族を救ひ、國家を救ふといふ誤つた正義感のために抗戦に馳り立てられたインテリも少くない。中には、絶望の結果、虚無の世界に擣進して行つた連中もある。彼らのうち、富豪の子弟は剝那主義者となり、いはゆる『摩登少爺』『摩登少姐』となつて、きらびやかな服装、これが戦時かと思はれるやうな姿態をもつて、外國流の享樂生活へ奔つてゐる。

事變前から支那を襲つた不景氣・慢性的經濟恐慌は、失業インテリを養出させた。彼らは就職難に悩み、生活の方途を失つてゐたのである。この失業インテリに、事變後影しく生じた失學青年が加つた。恐るべき混亂がそこにあつた。彼らはどうなつたのであらうか？

重慶で發行されてゐる『新民報』は『學府風光』といふいはば學生欄で次のやうなニュースを報じてゐる。それは、僅か一週間のうちに復旦大學の學生三人が相次いで自殺したといふのである。この三人の學生はいづれも復旦大學の給費生だったが、戦時下經營困難といふ理由から大學當局が給費生制度を廢止したことが、この三學生自殺の原因となつた。一人ははじめのうちには警物を買つたりなどして食ひつないでゐたが、絶望の結果つひに睡眠薬を申つて自殺したし、一人

は同じ寄宿舎にゐた學生の洋服を盗んだといふ嫌疑で警察に拘引され、留置場で一夜を明した後われとわが若き生命を絶つた。一人は三日三晩一食も口にすることができず、四日目にベッドに横つてゐた彼を學友が発見したときはすでに虫の息で動くこともならず、そのまゝこときれたといふのである。これが、相つゞ日本軍空襲下の重慶における貧窮學生のありのまゝの姿である。蔣介石の抗戦に陵かされて、上海から重慶へ、何千里といふ道のりを或ひは驕馬の背に、或ひは徒歩で移動して行つた純眞な學生達を待設けてゐた運命がこれであつたのだ。數多くの文化人・インテリもまた僥倖にして役人にでもなり得た者の外は、この三人の學生と同様、または似たやうな運命を背負はされてゐるのだ。それは最早、インテリといふに餘りにみじめな姿ではなからうか。延安に行き、ゲリラ部隊に参加したインテリが重慶のそれよりもさらに悲慘な状態にあることはいふまでもあるまい。

南京に擲く墨

インテリの特性の一つは、その批判的精神にあるといはれる。そして、批判はまづ懷疑からはじまる。支那のインテリといへども、この特性から外れるものではない。彼らはまづ抗戦重慶の

現實の姿を直視した。對日抗戰以外に果して支那の生きる道はないのであろうか？ 蔣介石は支那は、ために東亞における第一線陣地を擔當してゐるといふが、英米によつて擄取されて來た支那人が同じアジア民族である日本と、なぜ英米の利益のために戦はねばならぬのであろうか？ 戦火に洗はれた故郷の父や母や家族はどうしてゐるであらうか？ 日本軍に占領されてしまつたとはいつても、そこにある大地はやはり支那の大地であり、そこに生活してゐるのは支那人である。この無辜の人々のすべてが、一人の獨裁者蔣介石および少數の指導者の利益のために捨て去られてよいものであろうか？ かういつた懷疑が、まづ抗戰インテリの心を捉へはじめた。

現南京國民政府の樞成分子は、汪精衛主席をはじめすべて代表的な支那のインテリである。行政院副院長の周佛海氏は蘆溝橋事件の勃發當時すでに廬山において『低調俱樂部』を組織してゐた。支那全體が、日支の軍事的衝突に挑發されて、抗日へ、全面的戦争へ、と甲高く調子を昂めて行つたとき、これではいかぬ、このまゝ共産黨と手を握つて突つ走つたら大變なことになる、アジア全體のために何とかしなければならぬ、といつて反省し調子を低めるために努力したインテリであつた。日本が何を望んでゐるか、日本の聖戰目的がどこにあるか、といふことが近衛聲明によつてハッキリわかつたとき、これらの聰明なるインテリは重慶を捨て、和平建國運動を展

開したのである。本書の愛國者の姿をそこにみる事ができるのである。

抗戰に闘はされたインテリにも、漸くかうした南京の動きが明らかとなりつゝある。勇氣あるインテリは南京の希望の星の下に、和平建國の旗の下に續々馳せ参じてゐる。しかしながら、ある者はいまだに決斷がつかないでゐるし、ある者は抗戰の桎梏に縛りつけられて重慶側を逃げ出せないでゐる。また、いままほ抗戰を叫び續け和平建國者を漢奸呼ばはりしてゐる者もある。飯碗の問題からさうしてゐる者もあるし、本氣にさう思ひ込んでゐる者もある。それほど、支那のインテリには歐米人から受けた過去の教育が浸み込んでゐるのである。だが、彼らとてもやがては支那人としての自覺にめざめ、『アジア人のアジア』のために歐米人から着せられた外套を脱ぎ捨てる日が、必ず來るであらう。

(昭和十六年九月)

如是我觀中國人

支那人だらうが、蒙古人だらうが、印度人だらうが、安南人だらうが、はたまた、われわれ日本人だらうが、大した違ひはないといふのが、私の持論であつた。かくいへばとて、素朴な國際主義のなかに、私自身が墮ち込んでゐると思はれては困る。超國家とか、超民族とかいふ思想は、いまだき、猶太人のエミグラントでもなければ、氣の利いた共產主義者ですらも持つてはゐないのだ。

日本人だつて嫌ひな奴は嫌ひだし、支那人だつて好きな人は好きなんだ、と私はいひたいのである。無論、日本人と支那人がまるで同じだなどといふつもりはない。同じ支那人だつて、シンガポールやマニラでは、廣東人と福建人は、しよつちゆう反目し合つてゐるではないか。華僑だけでは、上海人と北京人では、すつかり異つたきつぷをもつてゐるのである。

私は、最近、あるところで『日本人は唾液を吐いては下駄の底で踏みこむが、支那人は唾液

吐いたなり、そつぽを向いて歩く』と書いたが、そんな違ひは日本人と支那人の間にたしかにあるのだ。十五、六歳のころから私共夫婦が懇意にし、いまはもう立派な日本の大學生となつてゐる蒙古の若い友達が従來使つてゐた支那風の姓名がいやになつたといつて、このごろ蒙古名前に選つてしまつた。この若い友達は、ときどき「僕は蒙古人ですよ」といつて民族的矜持を食卓の話題に投げかける。さういへば、彼の物の考へ方や動作などに、どこか豪放なところがある。支那人と蒙古人も、やはり異つたところがあるのである。

支那人一般について私はこゝで論じるつもりはない。それよりも私は特定の個人について語るとしよう。さて、個人といつても、その名前をこゝで擧げるのは、ちよつと困る。といふのは彼はいまだに重慶にゐるといし、抗戦を捨ててゐないからなのだ。假りに張といふ姓にしてもいい。張君と私は古い友達であつた。同じ机を並べたこともある。ところで、この張君と事變に従軍した私は天津の佛租界で逢つた。お互ひに家族の安否などを尋ねた後、彼はいつた。

「日支は戦戈を交へてゐる。だから、お互ひに國家民族の上立つてものをいふことは避けよう。それを、こゝでいくら論じ合つたところで結末がつかないと思ふ。僕は君にとつては敵人だし、君は僕にとつては敵人だからだ。」

「うん、ぢやあまあさうしとかう。」

と私は答へた。

「僕は、近く南京に行かうと思ふ。何かい、職が見つかつたのかつて？ いや、さうぢやない。が、國家が僕らのやうな學究でも必要としてゐるのだ。だから僕は南京に行くつもりだ。」

そのころ、上海はまだ陥落してゐなかつたし、南京には蔣介石が頑張つてゐた。労働法を専門にしてゐた張君が、何のために南京へ行くのか、げんにも思つたが『國難に赴く』といふその氣持には私も打たれるものがあつた。そこで私は、いよいよ張君が發つといふ日、支那服を着て天津總站まで見送りに行くことにした。

握別——この言葉が、私にはとても好ましいのだが——

「ぢや、行つて来いよ。身體に氣をつけてな。こんどはいつ逢へるかなあ——」

と私が、深い感慨を籠めて車窓の張君と手を握り合はうとしたとき、プラットフォームをつかつかと歩いて來たフランス人らしい肥つちよの巨漢が、私を押しつけさまに叫んだのである。

「Ahés ! (去れ！)」

張君と私は、思はず顔を見合せた。張君の腫のなかに、一瞬きらりと光つたものがあるやうに。

思へた。

支那が、東洋が、歐米人の軍艦とカノン砲で侵略されてからすでに百年になる。彼等は、この東洋の天地でわがもの顔に振舞ひ『アレー』とか『ゲラウエー！ get away ! (出て行け！)』とかいふ言葉を至るところで私達東洋人に投げつけてゐる。

いまや、われわれが彼等に向つて『去れ！』『出て失せろ！』といふ番になつて來たのである。重慶にゐるらしい張君も、このことが分りさへすれば、私達の仲間に加つて、碧眼の侵略者共に『出て行け』といふに違ひない。そのとき、張君と私は、手を握り合つて久瀾を叙したいと思ふ。

支那人も、日本人も、蒙古人も、印度人も、安南人も、歐米人に比べれば大して違はないのである。

(昭和十六年三月)